

終末の説話「信じてよかった」

福生市立福生第七小学校 高橋 翼

先生には小学生のときからの親友がいます。

中学生になると二人はバスケットボール部に入りました。その親友は一年生の時から3年生に混じって試合に出るくらいバスケットボールが上手でした。

三年生、二年生の先輩が部活を引退していき、いよいよ自分たちが三年生になりました。先生の親友はバスケットがとても上手だったのですが、仲間がミスをした時の注意の仕方がとてもきつくて仲間からこわがられていました。そのことを先生は知っていましたが、注意すると自分も何かきついことを言われるかもしれない、仲が悪くなってしまうかもしれないと思って、なかなか言い出せませんでした。

そんなある日、バスケットボール部の仲間が陰で先生の親友の注意の仕方について悪口を言っているのを耳にしました。

先生は、「このままでは親友にとっても、チームにとってもよくない」と思って、チームの仲間がミスした時の注意の仕方をもう少し優しくするように伝えようと思いました。しかし、そのことを伝えようとすると、とてもこわくなって、なかなか言い出せませんでした。

それでも、本当に思い切って伝えました。

伝えてみると、親友はお家の人からも同じことを言われて悩んでいました。

それから先生と親友は、仲間がミスした時の声の掛け方を一緒に考えました。

いきなりすべてを変えることは難しかったけれど、声の掛け方を変えようと努力している親友の様子を練習中にたくさん見ることができました。

そして、不思議なことに、伝える前より、先生も親友も心から部活を楽しむことができるようになりました。あの時、迷ったけれど、親友を信じて、思い切って伝えてよかったかと、今でも時々思い出しています。

終末の説話「許された体験」

昭島市立田中小学校 大澤 裕也

この写真のお店を知っていますか？

これは先生が大学生の時にアルバイトをしていたお店、「やよい軒」です。

大学の後期テストの勉強のために、先生が一週間ほどバイトを休んでいた日のことでした。

先生の携帯電話が鳴りました。バイト先の店長からで、「バイトが足りていないから出てほしい」という連絡でした。テスト勉強をやらなければならないとすこし悩みましたが、いつもお世話になっている店長からの頼みなので思い切ってアルバイトに行くことにしました。

久しぶりにアルバイトに来てみると新しいメニューが加わっていました。それは「水炊き」という鍋料理でした。

その日はとても忙しく、ざっと水炊きのレシピに目を通すと

すぐに料理を作り始めました。

しかし、先生は「水炊き」の味を決める大事なタレを入れな
いまま、「水炊きだから」と、水だけで「水炊き」を作り、それ
をお客さんに出してしまっていたのです。完全に確認不足でし
た。

最初の何回かはバレなかったのですが、しばらくするとお客
さんから店長に苦情が入り始めました。

店長はお客さんに頭を下げて謝っています。その様子を先生
は厨房の中からビクビクしながら見ていました。なぜなら、そ
の店長はとても厳しい人で、以前、料理を適当に作っていたバ
イトをクビにしたこともあったからです。

「絶対怒られる。バイトを首になるかもしれない。バイトな
んかに来なければよかった……。」

と後悔している内に、店長が厨房に戻ってきました。

先生はドキドキしながら、「店長、すいませんでした。」と謝
りました。すると、店長は、

「忙しいところを無理して来てくれたから今日は許すけど、

次からはしっかりレシピを確認しろよ。」

と言つて、水炊きのレシピを渡してくれました。

その時、先生はホッとし、店長が何だか先生の気持ちをわかってくれた気がして、とても嬉しく思いました。

それから、新メニューが出た時には、必ずしっかり確認するようにしました。そして、大学を卒業するまで同じお店でアルバイトを続けることができました。